

平成24年度 京都府立大学地域貢献型特別研究 (ACTR) 成果

分類 番号	A17	取組 名称	亀岡市旧亀山城下町および周辺地域における文化的景観 に関する調査研究
研究代表者：		生命環境科学研究科	職・氏名： 教授・大場 修
研究担当者（外部分担者）： 丹波亀山城と城下町を守る会・代表 永光 寛 亀岡市教育委員会社会教育課文化財係（丹波亀山城と城下町を守る会・事務局）中澤 勝			
主な連携機関（所在市町村、機関（部署）名） 亀岡市教育委員会			
【研究活動の要約】			
<p>本研究は、亀岡市の旧城下町の内外における伝統的な家屋を取り上げ、その建築的な特徴を検討した。特に注目したのは、亀岡旧城外の街道沿いに立地する伝統的家屋についてである。これらは、いわゆる農家なのか、あるいは町家なのか、その両方の特徴を有する中間的な存在なのか。本研究は、そのような素朴な疑問から始動した。そのために、家屋配置や平面構成、構造形式、などについてその特質を明確にすべく検討した。具体的には、亀岡市域における街道沿いの伝統的民家（調査対象地において183軒、内街道筋に立地する家屋110軒）を主対象に分布調査と聞き取り調査を行い、その中から重要と思われる家屋について実測調査を行った。その際には間取りの復元的把握と構造形式の把握に重点をおいた。</p>			
【研究活動の成果】			
<p>亀岡市域の街道筋には、街道に接して建ち座敷を裏手に設ける家屋と、前庭をもち座敷を表に配する家屋が混在する状況がわかった。前者は旧城下の町家と同じ家屋構成であり、後者は周辺農家（撰丹型、または四間取り型農家）と共通する家屋形式である。</p> <p>しかし、前者には角屋と前庭を付属するものも多く、これらは一見後者と同じように見えるし、また前者には前庭を後補するものもあることから、街道筋の民家には、前庭を備えた農家的な外観を好む傾向が読み取れた。</p> <p>一方構造形式は、農家型の形式から近在旧城下町の町家構造への移行が顕著であった。</p> <p>以上から、街道立地型民家は、町家的なものとの特徴の併存にその特質が認められた。</p>			
【研究成果の還元】			
<ol style="list-style-type: none"> 1. 本研究の成果の一部は、亀岡市地域活用実行委員会主催の講演会「フォーラム地域のたから：文化遺産とまちづくりについて」にて報告した（写真1参照、2012年10月21日、於：亀岡市総合福祉センター）。 2. 京都新聞「口丹随想」（2013年3月25日付朝刊）において、本研究に関する依頼原稿を投稿した。 3. 松崎渚・大場修「亀岡市域の街道筋における伝統的家屋に関する研究」『2013年度 日本建築学会近畿支部研究報告集』に投稿済み。 			
【お問い合わせ先】 生命環境科学研究科 史的住環境学研究室 教授・氏名 大場 修 E-mail: oba@kpu.ac.jp			

参考（イメージ図、活動写真等）



写真1：亀岡市地域活用実行委員会主催講演会「フォーラム地域のたから：文化遺産とまちづくりについて」（2012年10月21日，於：亀岡市総合福祉センター）



図1：篠山街道沿いにおける伝統民家の外観事例

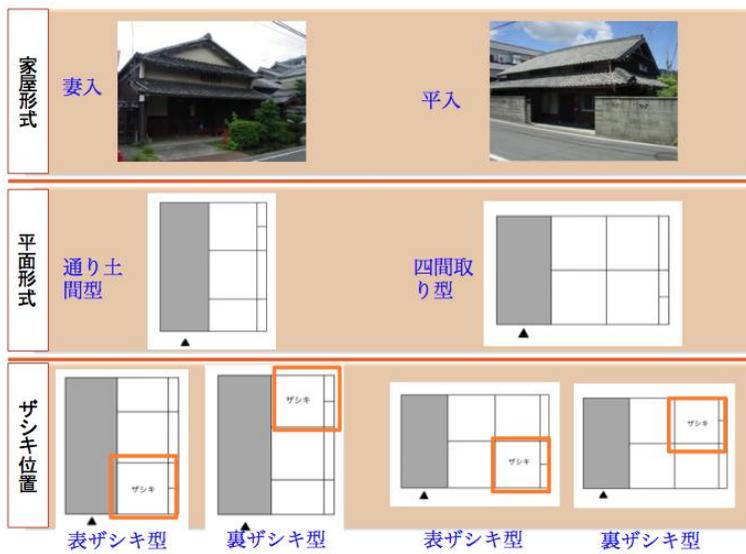


図2：篠山街道沿いの伝統民家分類図